

---

# 魔法少年リリカル？なのは

こーこうせい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少年リリカル？なのは

### 【Nコード】

N5852Z

### 【作者名】

こーこうせい

### 【あらすじ】

え？何？コレ読むの？

「魔法少女リリカルなのはが男の子！？性別性格正反対の彼が巻き起こす魔法世界！！一体どうなってしまうのか！！？」

魔法少年リリカル？なのは、始まる」

はじめたくないよ。

## ブログ（前書き）

え、コレ？半分ネタだから書きたいときに書くよ!!!  
だから超不定期更新（笑）

まあ、性転換物なので苦手な人は即Turn Around!!!  
o Back!!  
あ、12/20めちやくちや変更

## プロローグ

薄暗い森の中で一人の少女が何者かと戦っていた。少女は腕から血を流し、満身創痍。

一方対する相手は見たことのないような黒く禍々しい物体。黒い物体は少女に体当たりなどを繰り返し、少女を苦しめていく。

少女は懐から赤い宝石のような珠を取り出し、何かを叫ぶ。すると目の前に光で構成される円形の模様が現れた。

黒い物体はそれにぶつかり、その体から強い光を発する。物体はその光を恐れてか、大きく跳躍し、それから逃げる。

少女はそれを見た後膝を着いてしまう。追いかけてようと立ち上がるうとするが、疲労のせいかうまく立てない。そしてついには地面に倒れ伏せてしまう。

少女の体はそのまま光り始め、小動物の姿に変わった。そして小さな声で、消え入るような声で叫ぶ。

「逃がし、ちゃった……追いかけてなくちゃ……。誰か……。ボクの声  
を聞いて……。力を貸して。魔法の……。力を……」

その声は誰かに届いたのか、それとも届いていないのか……

- - - - -

P i P i P i P i ! ! !

けたたましい電子音と共に一人の少年が起きる。もぞりと布団が動き中から手が出て、音が出ていた対象、携帯電話のボタンを押す。

「もう、時間？」

そんな音と共に布団から出てきた顔はどうみても少女。

出てきたのは高町なのは、小学三年生。

男

どっからどう見ても少女だが男であるのだからしょうがない。ちやんとついでるよ？アレ。

現在時刻、6:00

さて、俺がこの時間に起きたのは他でもない。男らしい体になるため、トレーニングだ。俺の体は少し、いやかなり女。ついでに名前も女っぽい。男が女に見られるのは結構悲しいんだよ。

実は兄と姉は……まあ後で紹介するが、すでに起きて朝の練習をしていると思う。俺は小学三年生だから参加させてもらえなかった。まあ、休みの日はやらせてもらってるから多少は心得てる。

さて、今日やることは……朝のランニングかな。ひとまず3kmぐらいいつてこよう。

「ふう……」

とりま3km走って帰ってきた。ペースが上がっているのは嬉しい

よ。かなり嬉しい。だけどね、

「なんで道行く人すべてがなのはちゃんって言うかな。もう3ヶ月は走ってるのに」

多分いじめだと思う。

さて、家に戻り、シャワーを浴びて帰ってみると母さんがご飯の準備をしていた。

「あら、おかえりなのは。どうだった？」

「まあまあかな」

高町桃子

33歳の癖に謎の若さ。近所の人には魔女とか言われている。多分正解。俺の産みの親で女の子な顔にした張本人。髪の色から顔の形までほぼそっくり。男なのに。

「これもってってくれる？」

「あいよ」

母さんから渡され、もって行くいくつものコップ。俺には……お  
お、牛乳。I Love GYUNYU・英語だとmilkだがそ  
こは気にするな。

リビングにもって行くとそこには言わずもがな、100人中80人がイケメンだろうと言える人が。

「今日も走ってきたのか？偉いなあ……今度父さんも行くのかな」

「もう負けないよ？」

高町士郎

37歳という年の癖にイケメソ。近所の奥様方に人気。兄はこいつ譲り。ずるずる。

昔めっちゃ大怪我して入院してた。んで危ない仕事やめて今は翠屋つつう喫茶で働いてる。

翠屋は……まあ、黒歴史だらけだからまた今度。

さて、後いないのは兄と姉だけか……

「ちよつと二人呼んで来るわ」

「うん。お願い」

我が家自慢の道場にいったらみると兄と姉がいた。

兄は姉に小太刀二刀御神流を教えている。一見厨二だろ……とか思うけどコレマジ強い。

高町恭也

19歳。彼女もいるずるいやつ。イケメン。リア充。でもけんかは強い。

姉の美由紀。

高校2年。それ以外特になし。あ、あえて言うならかなりの料理音痴。砂糖と塩を間違えるならいい方。野菜を洗えといえば洗剤で洗ってくれる凄い奴。

「おーい、飯だつてさ」

後ろからタオルを投げる。

振り向かずに取った。半端ない奴。後ろに目でもあるのか。

さて、食卓につき、ご飯を食べる。俺は終始無言。

べつにしゃべれないわけじゃない。しゃべりたくないんだ。

「今朝のご飯もおいしいなあ！とくにこのスクランブルエッグが！」

「ほんとあ？トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味なの！」

「みんなあれだぞ？こんな料理上手なお母さんもって皆幸せだぞ？分かってんのか！？」

母親と父親然り。

いまだ新婚気分か。

「あ、美由紀、リボンが曲がってる」

「え、本当？」

兄と姉然り。

お前らはバカップルか。ってか兄、お前彼女いるだろう。

まあ、こんな具合でしゃべろうにもしゃべれない。甘ったるい空間が続くんだ。

飯から砂糖が出ないうちに俺はさっさと飯を食い、

「いつてきます」

早々と家を出た。

あそこにいたら胸やけがヤバイ。

まあ、そんな家族です。  
でも思う。

トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味  
もはや隠してないと思う。

## プロローグ（後書き）

え、ただの紹介。

あ、気づいての通りなのはとユーノしか変えませんがーw

出会い(笑)(前書き)

遊びすぎましたすみません。

ってかやっぱギャグとか無理w笑いを取れる気がしない。まあ、普通にシリアス系になると思いますよ。

でわ、どぞ

## 出会い（笑）

家を出て俺が向かった先は私立聖祥大学付属小学校。わりと名門、わりと頭がいい。んで、わりとお金持ちが通ってるんで小学校なのにバス通学。

いつもの時間にいつものバスに乗る。するといつもの面子がそこにいた。

「なのはちゃん！」

「なのは！こっちこっち！」

昨日はへんな夢を見て眠れなかったし、正直寝たりなかった俺は普通に一人用の座席に座ろうと試みるが、二人の「あなたの座るスペースは私達の間が決まっている」光線にあえなく沈黙。

俺だって男だ。女子の間にはさまれて座るのはかなりの抵抗がある。そして気づいてないかもだがこいつらは一応美少女。周りの男子…：まあ俺のことは知ってる奴の視線がヤバイ。他の奴らは多分女子三人にしか見てないと思うけど。

そして月村。ちゃんはやめると何度言えば分かる。

「よお、月村、バーニング」

「誰がバーニングよ！！」

小1からの付き合いの月村すずかとアリサ・バニングス。どう考え  
てもバーニング。声的にもバーニング。

「いいかげんちゃんと名前で呼びなさいよ!」

「ああ、悪いな、アル」

「ほんとだよ兄さ……何言わせんのよ!」

ノリつつこみもお手の物なお嬢様です。

月村は終始微笑んだ。テラ怖す。

小1のあることがきっかけで（不本意ながら）仲良くなってしまっ  
た。

最近は同じ塾にも行っていたりする。

まあ、そのことは後述。

さて、学校に着いて適当な授業を寝てすごして、4時間目終了の合  
図。

「飯だー!!!」

「高町さんうるさい!まだ終わってません」

授業が延びていたようです。やられた。

さてさて、はずかしー思い（爆）をしてすぐあと、俺は屋上に来ていた。

屋上は昼飯を食べるには絶好の場所。んでかなり人気な場所でもある。いつも一人で行こうとするのだが

「なのは！まちなさい！」

「なのはちゃんまって！」

なぜかいつもこいつらが付いて来る

「おまえら女子と食えよ」

「いいじゃない。あんた食べる人いないんでしょ？」

「しづく…」

確かに。

俺はこの容姿だからか、同性の友達は……多分いない。まあ、しゃべるくらいはあるが友達ではないかもしれない。つてか十人中十人が女というこの容姿。先生からも女子に見られていた俺は女子の友達しかいない。なんと言う悲しさ。

「ほら、行くわよ」

一人で行こうと思ったのに気づいたら3人いて、気づいたら屋上で飯食ってた。

「私はお父さんとお母さんの会社を継ぎたいかな。そのため経営学とかやるうと思ってる」

「私は機械系が好きだから、これから工学系に進みたいな」

「おまえら本当に9歳か？」

そしえ俺以外のこの二人。頭が大変よろしく、すでに将来のことを考えている。9歳なのに大学のことまで考えている凄い奴ら。俺は……まあ、そのうちなんとかなるさ。一応成績トップクラスやし。

「なあ、お前ら普通に就職とか考えてるけどさ、専業主婦とかはダメなの？」

「え？」

えって。普通はそっちが先に出るような気がする。

「だってよお、お前ら女だろ？そんなわざわざ仕事するとか……ばか？」

「バカじゃないわよ！！」

まあ、お前俺よりはバカだけどな。成績的に。

「ふ、普通に結婚とかも憧れてるわよ！？」

顔を真っ赤にして言うバーニング。  
そして辺りすっごい沈黙。

「」「」

「ちよっと！なんで黙るのよ！？」

俺と月村は顔を見合わせる。

そして俺はバーニングの肩に手を置いた。そして目を見つめる。

「ひゃっ!」

「あんなバーニング」

「な、何よ……」

「結婚ってな？相手が必要なんだ」

刹那俺の目の前は真っ黒になった。

だってこんな暴力系女子だれが受け止められるよ……こいつの告白シ

ーンとか考えてみ？絶対考えられねえよ。

「だ、大体あんたこそどうなのよ！あんたこそ結婚とか無理なんじやないの！？」

「なにをおっしゃるか。俺にはこいつがいる。なあ、月村」

「うん！」

口をあんぐりあけて驚いているバーニング。  
まあ、冗談はここま……どうした月村？

「なのはちゃん。式はどうする？和風？洋風？」

えっ。何この子。何言ってるの？

「そうよね。なのはにはさすが……お幸せに……」

「お前も何一言ってるの！？」

この事態を收拾するのに10分必要になった。月村はガチで悔しかった。どういうこっちゃん。

んで飯食う時間残り2分ちよい。終わったな。

ところでバーニング。その手の袋に入っているのは？

「メロンパンに決まってるじゃない！」

狙った？

そして帰り道。

今日は残念ながら塾なので歩いて帰路に向かう。すると途中、バーニングがこっち行こう！とかいいだしてわき道にそれた。塾に行く近道らしい。

そこで俺はふと気づく。

ここ、夢で見た場所じゃね？

なんかへんな場所だった気はしたけど…

「どうしたの？なのは」

「いや、なんでもねえ」

そのまま二人についていく。  
すると頭の中に声が響いた

《助けて！！》

！！？

突然聞こえる音にこわばる。

「おい、お前らなんか言ったか？」

「へ？なにいつてるのなのはちゃん。何もいつてな《助けて！！》」

月村がそういつているときにも聞こえる謎の声。  
どーゆーことだ。

「幻聴？」

「はい？……すずか。離れなさい。きつとこいつ精神病患者だわ」

「んなわけあるか！！」

しかしそんなことを言われても聞こえてしまったのだから仕方ない。

とりあえず、頭の中で返事をする。

《俺に言ってる？》

まあ、こんなんで意味があるとは思えない。

気のせいか、と思い二人についていくことに。しかし少しあるいた後、再び聞こえてくる。

《良かった……聞いてくれた人が》

《うわ、マジで聞こえた！》

先に行く月村とバーニングを横目に、立ち止まり、耳をふさいで精神集中。

《説明は後ですますから……助けてください！》

考えるより早く、俺は先に行く二人を追い越し走り出していた。

「ちょー！なのは！？どうしたの！？あんた本当に！？」

「なのはちゃん！！」

バーニングの言葉を全力で否定したいがそんな暇はない。  
声を頼りに走る。

そして走った先にいたのはフェレットっぽい動物。首には赤い宝石  
のようなものがついている。体は傷つき、慢心相違だ。

「ちょっと、あんた…早すぎ…」

遅れてきたのは息切れ切れのバーニングと済ました顔の月村  
俺は地面にいたフェレットっぽいのを片手でつかみ

「月村、こいつ頼むわ」

「え？……わ！！」

月村に放り投げた

「フェレット？ってすごい怪我してる！！」

「ああ、病院でも行くか」

俺達二人は急ぎ足で近くの病院へ向かった。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

バーニングは遅れて着いてきた。まあ、息は切れてるが問題はないだろう

出会い(笑)(後書き)

辛口コメントくれると嬉しいです...

魔法（笑）（前書き）

作成時間10分という短さww  
まあ、半分ねただしww

でわ、どぞー！

## 魔法（笑）

前回のあらすじ

女っばい男高町なのは！学校ではお嬢様達と戯れてます！

帰り道、お嬢様（笑）のお達して近道したら幻聴が聞こえて来ちゃった。

声を頼りに歩くとなんか不思議なフェレットが……。怪我してるっぽかったからとりま病院へ！！

病院で見てもらったけど、怪我はたいしたことはないらしいよ！よかった！

まあ、衰弱はしてるみたいで、休養は必須だったさ！

「いんちよーせんせー。こいつって誰かのペット？ってかホントにフェレット？」

「うーん、フェレットなのかな？変わった種類みたい。それにこの首についてるのは…宝石？」

いんちよーせんせーの言つとおりフェレットには近いようで違つ。んで、宝石付けてるペットって……。バーニング家の犬かよ……。

「つけてないわよ!!」

「なぜいきなり叫ぶし。耳が痛い」

ってかなぜ分かった。

いんちよーせんせーがフェレットもどきの首についている宝石に触ろうとしたらフェレットもどきはふっと目を覚ましてきよるきよるしました。何か探してんのかなーとか思ってたらなんか目があった。まった。

「……………」

「……………」

「……………」

全員の視線が俺に…………

「よせやい！照れるだろ！」

なぜかお嬢様二人にため息を疲れた。  
俺何かやった!!?」

「ってかこいつの引き取り先どうするのせんせー」

「うーん……まあ、しばらくはこの子も安静にしとかなきゃだから  
こっちで預かるけど……」

まあ、目線など見る限りキラッキラしてる月村家だろうなあ……バ  
ーニング家はほしがるかもだが噛み殺しそう。おもにバーニングが  
ちなみにうちも無理だな。飲食店だし。

「今度で良いわよ。明日も来てくれるかしら?」

「はい!!……って!!塾の時間!!」

返事をした途端に気づいた。

現在時刻 16:36 塾開始 16:45

俺としては遅れてもいいんだけど、1分でも遅れると宿題が増える  
のが困る。俺は宿題こなす派なんだ。

まあ、こっから塾まで走って7分……結構ギリギリかな。

とりま俺は全力疾走。見事6分で走りきりセーフ。次いで月村もセーフ。  
バーニング？

「あんたたち、なんでそんなに早いんだよ……」

9分かかって1分アウト。  
せんせーに宿題追加されてた。

んで、結局授業中寝てた俺。途中当てられた問題は余裕だったし、塾行く必要があるのか？とか思いつつ確認テスト……あ、やべ。全然わからねえ。

とりあえず家で相談してみた。

親父：フェレットって何だっけ？

母親：世話するなら

兄妹：異存なし

と、飼ってもいいことになった。

メールで報告したら明日学校帰りに取りに行くことになった。

まあ、なんだかんだでねーさんが世話してくれるんじゃないかなー  
とか思ってる。

さて、現在時刻21時前

正直そろそろ眠い。ということと寝ようかな？って思ってたら

グラリ

と世界が揺れた。幻聴が入ってきたときの感覚。目を閉じて集中すると本当に声が聞こえてきた。

『聞こえますか！？ボクの声が聞こえますか！？』

よくよく考えると夕べ見た夢の中の声と、昼の声は一緒だったよ。  
なんといいいますか嫌な予感。

『ボクの声が聞こえるあなた！！ボクに少しでも力をかしてください！』

念のため、返事を出してみる

『お前、あのフェレットか？』

『！！あなたは！お願いです！早く来てくださ』

プツンという音と共に消える声。次いで異常な疲労感。訳も分からずベッドへボタンキユー。あ、うとうと気持ちいい……つてところで何かが背筋を凍らせる。何かは知りません。走りに行っただってことにして、とりま病院へ向かった。

急な全力疾走と、急な停止、加えてへんな幻聴リターンズのせいか、病院に着いたら謎の頭痛。  
んで、気づいたら

「ナニコレ」

灰色の世界に。

いや、どゆこと？

そしておまけに頭上から凄い破壊音

ハツとして振り向くとそっから問題のフェレットが落ちてくる。綺麗に着地するとそのまま横を走っていく。綺

「お、おい！待ってって！俺呼んだだろ！？」

残念ながら答えることはなく、そのまま木へ上っていった。端から

見たら俺変態じゃん。

はぁ、と思って帰ろうとしたら再び破壊音。

「!?!?」

木のほうへ目を向けるとそこにあったのは倒れた木と真っ黒い怪物。

「なんだよ、コレ……どういふことだよ……」

圧倒的な力。何もかもを破壊する絶対的力。親父とか兄貴とかと稽古するときと似た感じ。いや、それよりもっと上のもの。誰もが得体の知れない物体に持つ感情だ。

そう、それはつまり

「かつけえ……」

憧れだろ。

恐怖心より好奇心が多い。俺だってまだ戦隊ヒーローもの好きだからな。

ふむふむ、と感心していると一匹のフェレットがよろよろ近づいてきた。ってか忘れてたよ。君の事。

「きて、くれたの？」

「しゃべった!!？」

まあ、さっきの幻聴で知ってたけどね。

そんなことをしていると真っ黒い怪物がこっちを向いていた。アレ？  
コレやばくね？

「とりあえず逃げんぞー！」

「えっ！？ちょー！！」

フェレットを抱え全力疾走。

ダダダダダ！つと町を駆け抜ける。ある程度行ったところで聞いてみた。

「アイツ何者？」

それにたいした答え

「君には資質がある」

「いや、その前にアイツ何？」

「少しだけ力を貸してください。ボクは探し者をしにここへ……」  
云々。

あ、なんだろう。会話がかみ合わない。

「まあ、なんだ。とりあえず、俺には資質が合って、それで力を貸せよ」

「そう！、そうなんです」

なんか俺には魔法を操る力があるらしい。ソレを使ってフェレットの手伝い……なるほどねえ。魔法って事は空飛んだりするあれか。実にファンシーだね。

「貸してくれますか？」

「ああ、そうだな」

「ありがとございま」だが断る「ってええええ！？」

だってこええじゃん。流れるにあれだろ？あの怪物……っていうか今空から振ってきてコンクリを自由に破壊してるコレと戦うとかそいう。無理無理。小3に何頼むか。近づいただけでつぶされるわ。

「他にあたりな」

「御礼はしますから！…！」

「なんだと」

お礼……

「どんなことでも？」

「どんなことでも」

「無茶な願いも？」

「無茶な願いも！」

俺の顔女顔 フェレットの願い出なおしてもらおう 脱女キタ！！

「あんたいい奴だな！よし、引き受けた。で、何すればいい」

「ええ！！？いいのかい！？……分かった。じゃあ心を済ませてボクに続いて！」

お、おう。それだけで良いのか

「我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て。風は空に、星は天に。そして、不屈の心はこの胸に。」

「我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て。風は空に、星は天に。そして、不屈の心はこの胸に。」

なんつつか厨二・

「この手に魔法を！レイジングハート・セットアップ！！」

「この手に魔法を！レイジングハート・セットアップ！！」

唱え終わったら宝石から声が聞こえた。

《Stend by Ready・Set UP》

瞬間俺の体を光が包む。

「なんだなんだ！！？」

「凄い魔力だ……」

いや、感心しないで。フェレット君。

光が強くなったところで頭の中で声が響いた。

《マスター。あなたの身を守る杖の形と衣服をイメージしてください》

なんかしゃべった!!?つかイメージなんて無理!!

《私はこのデバイス、レイジングハートです。よろしければ私が自動でおつくりしますが》

もういいよそれで!!

とりま心の中で叫ぶ。イメージとかすぐできないし!!そして服を剥ぎ取られ、お着替え。今人に見られたら死ぬ自身ある。だってさ

光が収まったとき、俺の服装はロングスカートっぽいズボン、それに白が基調なコート、極め付きに胸には大きな赤いリボンだったんだよ?

「なんで女っぽい服なんだよ」

《正直性別が判断できなくて………てへっ》

なんだろう。すっごくイラッと来た。

魔法（笑）（後書き）

女っぽいってのは分かってたはず。

レイハちゃんおちゃめ（笑）

なのはの服装は原作のスカートの真ん中を二股にしただけwだから  
ダボダボズボンなだけですw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5852z/>

---

魔法少年リリカル？なのは

2011年12月25日01時48分発行